

キャンパス・コラム

心配

電気・電子・情報通信工学科の四年生の前期必修科目に、「科学技術英語」なるものがあり、小生が担当することになって四年が経った。

理工系の学生諸氏の専門分野の語学力の低下は、経験として現実と言わざるを得ないとは思っていたが、我々電気系の教員が語学教育なのでできる訳はない。なんだかんだの議論の末、卒業してから英語は分かりませんでは困るし、もともと英語に経験が無いわけではないのだから、少なくとも英文に逃げ腰にならないで卒業してゆくように仕向けよう、と言った辺りに結論が落ちついた。

生まれて初めての英語教師！漱石の気分！とはなるはずもない初陣だったのだが、これが結構刺激的？で、テキストの下調べの段階で己の知識の薄さを思い知り、挙げ句の果てに辞書と

高校生用の文法書を並べて悪態をひとりごちる楽しみまで知ってしまった。それに対し教室の現場は、にわか教師の隠れたる悪戦苦闘とは対照的に、まことに静かな反応。よほどのドジをこちらがやらなければ質問は無し。毎回、テキストの一部を訳したA4一枚を出席カードとしたが、この大半が???…。ほとんどが「英文」を見たら、次の行為は「和訳」と言う「掟」に縛られているのだ。

英文を読んで内容が理解できなければ、日本語にはならない。そこで「君達は日本語の専門書を一度読んで内容が理解できるのか!」、「ひたすら読んで、中身を分かれ!」、「直ぐに訳すな!」と新米教師は無茶苦茶を言うことになるのだが、その効果は少しづつではあるが、出てきたと思いたい。その結果、「日本語をもう少し考えて書けよ」と言う思いが正直なところとなった。

広報委員 榊原 剛 (理工学部教授)

オリピックの野球に出場したプロとアマの選手達が、チームの団結を計るために、共通の合図を作ったとまいったと聞き、何か非常に嬉しい感じがした。中央大学から一人参加した阿部君も、きつとその合図でやり一層「仲間」という意識になれたのではないか。▼競泳200m平泳ぎの予選、泳ぎ終わった田中さんが、次に泳ぐ後輩磯田さんに合図を送った。その合図が緊張した心をどれほど和らげたか想像してやまない。オリピックという極限の世界は、本当の「仲間」を作り出す最も素晴らしい舞台なのではないだろうか。▼金メダルという「結晶」を作り出す研ぎ澄まされた神経と体は、時として壊れてしまうほど脆いようにも感じる。しかし、その世界に身を置くことで、我々が想像できないほど多くの「経験」を一瞬にして味わえることも確かなのである。「経験」は次の「仲間」の「結晶」を生み出すための道具なのかも知れない。▼「仲間」「経験」「結晶」というお土産をたくさんバッグに詰めて、胸を張って帰国して欲しいものである。我々は、そのバッグを持った君達の笑顔を待っているのだから。

(広報課)

編集後記

		2000・10月号(第160号) 2000年(平成12年)10月1日発行
発行 中央大学広報委員会 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1	<編集担当> 広報課 ☎0426-74-2146 印刷 泰成印刷株式会社 〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12 電話 03-3631-8141	